

目 次

大会プログラム.....1	学会誌に関する記事の訂正.....7
大会日程.....1	2005年度会費納入のお知らせ.....7
シンポジウム.....2	会員による研究会の企画募集.....7
発題テーマ.....2	幹事会報告.....7
個人発表.....3	日本学術会議公開シンポジウムのお知らせ.....7
ワークショップ.....5	日本女性学会誌発行のお知らせ.....8
交通アクセス.....6	会員の著作.....8
大会事務局からのお知らせとお願い.....6	書評.....8
学会からのお知らせ.....7	会員情報.....(別紙)

2005年度日本女性学会大会プログラム

日 時：2005年6月11日(土)・12日(日)

場 所：横浜国立大学 教育文化ホール

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-1

参加費 会員：無料 非会員：1,000円

第1日目6月11日(土曜日)

場 所：横浜国立大学 教育文化ホール

開 場/受 付 12時30分

シンポジウム 13時～16時30分

フェミニズムと戦争—「銃後」から「前線」への女性の「進出」!?を踏まえて

パネリスト：佐藤文香、海妻径子、岡野八代

コーディネーター：千田有紀

総 会：17時～18時

(*この間非会員向けにビデオ上映を行いません
「30年のシスターフッド 70年代ウーマンリブの女たち」(制作 山上千恵子・瀬山紀子/57分/2004))

懇 親 会：18時15分～20時 大学会館

参 加 費 会員：無料 非会員：1,000円

第2日目6月12日(日曜日)

個 人 発 表 10時～12時

ワークショップ/個人発表 13時～15時

シンポジウム

フェミニズムと戦争

—「銃後」から「前線」への女性の「進出」!? を踏まえて

お知らせ：前号ニュースレターでは、シンポジウム・パネリストとして米山リサさんを予定してお伝えしましたが、その後都合により、岡野八代さんに変更になりました。

コーディネーター 千田 有紀

今回の大会シンポジウムでは、フェミニズムと戦争を根本的に問い直すことが課題である。戦後のフェミニズム思想では、第二次世界大戦において、女たちが「母」として、「銃後」を支えてきたことが、反省的に問い直されてきた。しかし、湾岸戦争からイラクにおける戦争にいたっては、女性が兵士として参戦するという事態が生まれ、女性が「前線」にまで「進出」してきた事態をど

のように捉えるのかという問題がわたし達に突きつけられている。しかもアフガンに対する攻撃に際して、タリバンからの「女性解放」が口実として利用され、アルグレイブ刑務所において、男性性を模した女性兵士が男性を虐待している写真が全世界に衝撃を与えるなど、問題は錯綜してきている。このフェミニズムと戦争をめぐる問題の複雑性を損なうことなく、踏み込んで複雑性を解き明かし、議論することを目指したい。

発題テーマ

佐藤 文香

兵士でありかつ女性である女性兵士をとりまく状況について報告を行いたい。

その一つの典型的な事態が性暴力である。1990年代以降、米軍の女嫌いの文化を改革しようと内外のフェミニストたちは取り組んできたが、この改革の「成果」は疑わしい状況にある。

一方、もう一つの事態がジェンダー化された戦域配置である。軍事組織の戦域はフォーマルな政策としてはジェンダー非関与な方向へと進められてきたものの、インフォーマルな形での分離状況はいまだ観察される。

こうした事態の継続には、組織文化を維持し、抵抗を困難にさせていくメカニズムの作用を考える必要がある。本報告では、その一端が女性兵士たち自身の戦略的な行為によって支えられているものであること、彼女たちの戦略的な行為がどのように生じ、どのように組織文化を維持・再生産していつてしまうのかを明らかにしていきたい。

海妻 径子

女性兵士の捕虜虐待は、軍事暴力への女性の「男なみ」参加の象徴と言われる。だが「総力戦」から「日常に埋めこまれた戦争」へという変化の中、劣位化＝フェミニズドされた者ほど軍事的行為の直接参加者にならざるを得ない状況がある。むしろ、ネオリベラリズムによる

格差拡大の中、よりフェミニズドされた女性を兵士にし、かつその身体を敵のフェミニゼーション（「女より劣位の、もはや男ではない者」というステイグマ化）に利用するという、新たな女性（性）の＜動員＞ではないのか。しかも「日常に埋めこまれた戦争」下では軍需に奉仕する「銃後」は明確に形成されない。＜平時の＞経済活動も暴力に荷担している、とのネオ帝国主義批判はこれまでもなされたが、「銃後」のモザイク化が豊かな日常と暴力との結び付きをさらに不可視化し、再生産領域重視の論理が厭戦に結び付かず「テロとの戦い」を支持する＜逆機能＞に陥っていること指摘したい。

「暴力」の主体から「非暴力」のエイジェンシーへ—世界の軍事化にフェミニズムは対抗しうるか？

岡野 八代

本報告では、9.11以後の合衆国におけるフェミニスト研究者たちの反応をてがかりにしながら、軍事国家である近代的国民国家と近代的主体との密接なかかわりを指摘したい。

9.11以後の合衆国であからさまになった事実は、国家の軍事的防衛は当然である、という考えを合衆国の多くのフェミニストが当然視していることであった。他方、80年代以降の文化帝国主義批判にも関わらず、アフガニスタン攻撃時になお、多くのフェミニストはアフガン女性の救済者として振舞った。報告者は、この二つの現象を近代的「主体」の呪縛から逃れられない結果として考えてみたい。ここでいう「主体」とは、自己の傷つきやすさ

vulnerabilityを受け止められず、過剰に他者（性）から自己防衛しようとするために、他者への暴力をよしとする「主体」である。

そのように考えると、9.11以後の合衆国の軍事攻撃に反対したフェミニストが、ジュディス・バトラー（Precarious Life: 2004）、ドゥルシラ・コーネル（Defending Ideals: 2004）であることに納得がいく。両者はラディカル

に「近代的主体」を批判してきた理論家だからである。

報告は、主体はつねに他者に対する「暴力(の/的)主体」である、と論証することが中心となるが、バトラーの最近の著作から、他者への「責任」「倫理」を要請されるエイジェンシー像、あるいはフェミニストの知見から導き出される新しい「非--暴力」「平和」の担い手像を荒削りであるが描いてみたい。

個人発表

(10:00~12:00)

第1分科会

司会：舘 かおる

(1) 廃娼論と産児制限論の融合

—安部磯雄の優生思想について

林 葉子

これまで廃娼運動と産児制限運動は別個のものとして論じられてきたが、両者をつなぐ論理にこそみられる優生思想の問題について、安部磯雄を一例として論じる。また安部ら廓清会の廃娼論と婦人矯風会の廃娼論とを比較し、さらにそれぞれの先行研究における論じられ方について比較検討し、廃娼運動研究にみられるジェンダーバイアスについて論じる。

(2) 女性運動史を記録する意味をめぐって

—70年代ウーマンリブの映像記録をつくって

瀬山 紀子

女性運動史の記録化の過程には、そこに関わった個々の女性たちにとっての個別の経験としての運動を、一つのまとまりをもった時代の記録として記述し、それを現時点で振り返ることの意味を考える作業が含まれている。本報告では、70年代にウーマンリブ運動を担った女性たちへのインタビューを用いた映像記録（『30年のシスターフッド 70年代ウーマンリブの女たち』）制作の過程を振り返りながら、運動史を記録することの意味について考えたい。

にどのように取り込まれ、日本の政治にどのような役割を果たしてきたのかが不可視にされてきたのではないか。農業中心の在来社会と自動車産業の企業社会、2つの権力が対立した豊田市の昭和30年代を事例に、女性の投票行動をジェンダー視点から問題化、考察する。

(2) 公共圏と女性

—自発的に参加する女性の視点からの考察

堀 久美

住民参加型活動を中心とする「公共圏」のあり方を自発的に参加する女性の視点から考察する。

筆者自身が公共圏で活動する女性であり、同じように活動する仲間とともに、活動における問題点を検討する連続講座を実施した。その講座参加者の言葉をもとに検討すると、女性たちの求めているものが、社会的・文化的目的と経済的目的が重なり合う社会であることが明らかとなる。女性たちは、活動を通して、ジェンダー規範やジェンダー差別等の問題点を乗り越え、利己的でありながら利他的でありたいという「思い」を生かしたままに、自らが自立した存在として生きていけるような社会を創造しようとしている。

それを可能にするためには、市場交換以外の互酬や再分配といった非市場経済領域を含めた新しい経済学の確立が必要であり、政治性のある「ニーズの解釈」を女性自身によって行うことを可能にする公共圏の創造が必要であることを論じる。

第3分科会

司会：内海崎貴子

第2分科会

司会：岩本美砂子

(1) 不可視化された女性の投票・投票行動

—豊田市の昭和30年代を中心に

真野 昌子

女性の投票率は1955年～1973年までの国政・地方選挙から男性より高く推移してきた。その高さに隠されて女性の高い投票参加の意味するものや、男性中心政治体制

(1) 妻が求める夫の育児支援のありかた

藤原 珠江

育児をする母親にとって、最も身近な存在である夫の育児支援は妻の育児不安や育児ストレスを軽減させる事が、先行研究で明らかになっている。また妻の夫への満足感や育児に対する意識にも影響を与えているのではないかと考えられるが、このような視点からの研究は少ない。

そこで、乳幼児をもつ母親を対象に調査を実施し、夫が実際に行なっている支援の実態と妻達が夫に求めている支援は何かを明らかにした。また夫の育児支援のあり方が夫婦関係の満足度にどのように影響しているのかも検討した。

(2) 保育者の持つジェンダー意識について

鈴木絵理子

幼児教育におけるジェンダー研究の蓄積は1990年以降徐々に進んでいる。言うまでもなく、子どものジェンダー形成において保育者の持つ役割は非常に大きい。そこで、本報告においては、保育園に勤務する職員たちがどのようなジェンダー意識を持っているのか、また子どもとの関わりの中でどのようなジェンダー意識が働いているのかを質問紙調査の集計結果から分析し、明らかにしたい。

第4分科会

司会：小林富久子

(1) インターネット時代の暴力ポルノ

山本有紀乃

インターネットの普及によって、ポルノグラフィの市場は爆発的に拡大し、供給も膨大に増えました。それに伴い、子どもポルノや盗撮映像の配信といったポルノ犯罪が増大しています。そしてまた、暴力的な内容のポルノがエスカレートする事態を生んでいます。この発表では、インターネットによって生じたポルノ制作・消費現場の変化、暴力ポルノの制作で多くの女性に生じている被害の実態などを、実証的かつ理論的に報告します。

(2) 近代の「文学」概念の再検討—自然主義における女性文学志望者の葛藤をめぐって

根岸 泰子

明治30年代以降の出版ジャーナリズムの進展下、文学的価値の概念はどのように変容していったかを、ジェンダーの観点から照射してみたい。明治40年代以降の自然主義の、一見ジェンダー中立的な「現実描写」のテーゼは、女性作家に対しては作家主体のジェンダー抑圧と、「女性独自」の感受性とテーマの称揚というダブルバインドとして働いていた。加えて「文学」によって“自活”の夢を果たそうとした彼女らが直面した上記の「文学」的価値観や出版ジャーナリズムとの葛藤は、女性テキストにどのように反映していったか。これらの問題を、同時期の水野仙子と田山花袋の師弟関係を中心に検証する予定である。

第5分科会

司会：河原崎やす子

(1) 小学校教育に入り込んでいる『戦い』教材とジェンダー

木村 松子

小学生の暴力行為が2003年度1,777件と前年度に比べ、28%増の過去最多となったことが昨年、文部科学省の「問題行動調査」で分かった。暴力は、子どもが家庭においてテレビ番組等で目にするだけでなく、学校においても、アニメーションキャラクターを採用したドリル教材・国語教科書に描かれた昔話・ワークテストでの問題文などに登場し、戦い場面と固定的なジェンダーが学ばれている状況がある。2004・2005年度採用教材を検討し、報告する。

(2) 府立高校非常勤講師における賃金格差の納得度と関連要因に関する研究—性別の違いに注目して

中原 朝子

公務職場におけるパートタイム労働者、中でも非常勤講師を対象に、男女の賃金納得度について分析する。

非常勤講師の特徴として、(1)基本職務が「授業」を行うという点で、正規労働者と職務がほぼ同一なこと、(2)非常勤講師全員の学歴はほぼ同一であること、(3)非常勤講師の賃金は、性別・年齢・経験に関係なく同一であること、(4)非常勤講師の割合が男女ほぼ同数であること、の4点をあげることができる。

このような特徴をもつ非常勤講師に、賃金についてどのように思っているか聞いてみたところ、納得度に男女差は無かったものの、納得度に関連する要因に違いが認められた。

このような結果を基に、男女の納得度に関連する要因の違い、また一般のパートタイム労働者と非常勤講師ではどのような点が異なるかを考察する予定である。

個人発表

(13:00~15:00)

第6分科会

司会：楠瀬 佳子

(1) 女性学研究者の自治体の男女平等政策への貢献に関する調査報告

小松満貴子

本年2月本学会員の一部に対してアンケートさせて頂いた結果の報告である。1995年から10年、日本のフェミニストは自治体の男女平等推進政策にどう関わり、どう

貢献してきたのだろうか。共同して推進する体制は出来ているのだろうか。激しさを増してきたジェンダーフリー・パッシングにどんな影響を受け、どう対処すべきか、調査結果をふまえ、参加者と一緒に考えたい。

(2) 開発における「女性向け技術研修」支援の課題

—バングラデシュ女性農業研修センターの事例から
水野 桂子

本報告では、2000年から2004年にかけて女性農業研修センターの研修事業を支援した活動と研修修了生の調査をもとに、開発における「女性向け技術研修」支援の課題を論じる。研修生となった農村出身の女性たちが研修を通じて見せた社会参画への反応には、日本の地域で「男女共同参画学習」に初めて出会った女性たちのものと近い部分があった。ジェンダー平等を理想とする法律及び政策と女性を巡る現状とのギャップは、両国に共通することであり、「開発とジェンダー」の課題が地球的規模で共有なものであることにも言及したい。

(3) 結婚を目的とした女性の国際移動の現状

—インドシナ系の女性を事例として

長谷部美佳

本報告は、女性の国際移動の中で「付随的移動」としてこれまであまり研究対象とされてこなかった、結婚を目的とした国際移動に焦点をあて、その移動を促す要因や日本社会における生活の現状を、日本におけるインドシナ系定住者の女性の語りを通じて明らかにすることを目的としている。特に労働者や日本人の配偶者の外国籍女性と同様、同国出身の男性との結婚を目的とした女性たちも、その移動や定住過程においてジェンダーの問題に直面していることを素描したい。

第7分科会

司会：北仲 千里

(1) 文部省が発行した指導用資料集にみられる「性被害」観の変遷

杉村 直美

学校現場において、「性被害」にあった生徒に十分な配慮がなされているとはいえない。文部省が作成した資料集は、現場の教職員の生徒への接し方に影響を与えていると考えられる。そこで内容が「性被害」に言及しているもののうち、3冊（1.『生徒の問題行動に関する基礎資料—中学校・高等学校編』1979年 2.『生徒指導における性に関する指導—中学校・高等学校編』1986年

3.『学校における性教育の考え方、進め方』1999年）について分析する。

(2) ドメスティック・バイオレンス (DV) の発生要因に関する一考察

四之宮玲子

DV発生要因は、複合化していることは明らかであるが、一つに家長制的支配思想が挙げられる。DVは多くの場合、パートナー関係を長く維持するほど加害者の行動として習慣化し、家族にハビトウスとして内在化されていくケースが多い。社会的地位のある加害者、またアルコール依存症などの問題をもつ加害者、どちらも社会構造や家庭教育でもたらされた家長制的な支配思想をもち、DVを慣習行動として行使する。本発表では、これらを事例によって分析し、その要因を分析する。

第8分科会

司会：伊田 広行

(1) 女子大生のジェンダースキーマの形成要因と、それが他女性への評価に与える影響

吉武久美子

女子大生のジェンダースキーマの形成に影響を与える要因（母親のジェンダータイプ、母親の就業形態、母娘の心理的關係など）を検討した。また、形成されたジェンダースキーマのもたらす効果を検討した。男女大学生が登場する討論ビデオを見せ、その発言内容を評価させた所、強いジェンダースキーマを持つ女子大生は、男性の発言を高く、女性の発言を低く評価した。女性自身が自らのジェンダースキーマによって、他の女性の評価を低めるといふ、かまえや偏見の影響を実験によって実際に示したものである。

(2) 「フェミニズム離れ」と第三波フェミニズム

荒木 菜穂

近年若い世代の女性を中心に、フェミニズム離れの現象が見られる。しかしその一方で、フェミニズムと距離を置きつつ、従来フェミニズムが問題としてきた男女の構造的な権力関係にたいし、女性個人が何らかの働きかけを起こす動きも存在する。本報告では、これらの動きを反フェミニズムの一環と見なすのではなく、そこに新たなフェミニズム的政治性を見出すことができるのではないかということについて考察していきたい。

ワークショップ

(13:00~15:00)

(1) 教育実習におけるセクシュアル・ハラスメントの現状と課題—全国調査の実態から

内海崎貴子、岡明秀忠、蔵原三雪、清水康幸、田中 裕

教育現場における性暴力のひとつであるセクハラ被害は、児童生徒はもとより教育実習生にも及んでいる。本報告では、教育実習生を対象とした初の全国調査のデータをもとに、学校教育の場で起こるセクハラの実態とその構造を明らかにしたい。

(2) ドメスティック・バイオレンス問題の今—求められている支援、私たちができること

池橋みどり & 原田恵理子
司会：武田万里子

2001年に成立したDV防止法も2004年に改正され、ドメ

スティック・バイオレンスに対する国をあげての取り組みは進みつつあるように思われる。報告者らは、2004年独立行政法人福祉医療機構子育て支援基金の助成を受け、ドメスティック・バイオレンスの家庭で育つ子どもへの支援に関する調査を行った。そこからは、DVの目撃という被害を受けながら、ほとんど支援を受けることのできない状態に置かれている子どもの様子が見えてきた。ワークショップでは、この調査結果の概要と、1年を経過した佐賀県DV対策総合センターの取り組みを報告する。その上で、私たちは、この問題に対し、何をすることができるのか、参加者とともに考える場としたい。

(3) シンポジウム「戦争とフェミニズム」をめぐって

佐藤文香、千田有紀、海妻径子

前日のシンポジウム「戦争とフェミニズム」で議論された内容を、さらに深めるために、ワークショップをもつ。活発な意見交換を行ないたい。

交通アクセス

横浜国立大学へのアクセス

横浜駅西口バスターミナルより乗車

(西口は高島屋、ベイシェラトンホテル側)

*相鉄バス 10番乗り場

(交通裁判所循環) 岡沢町下車→正門

10-15分間隔、バス所要時間15-20分 徒歩3分

*横浜市営バス201系統 14番乗り場

(循環内回り) 岡沢町下車→正門

毎時50分に1本のみ、バス所要時間10-15分

徒歩3分

*岡沢町バス停からは、前方歩道橋をわたり、右側道 沿いに歩き、階段を上ると正面に守衛所。

*タクシーは、バスと同じターミナルから、1200-1500円 横浜国立大学正門へ。

【横浜市営地下鉄】

三ツ沢上町駅下車→徒歩約16分(正門)

新横浜からは10分で便利ですが、徒歩距離はかなりあります。横浜駅からバス利用のほうがお勧めです。

なお、お急ぎの場合タクシーは1500円ぐらい。

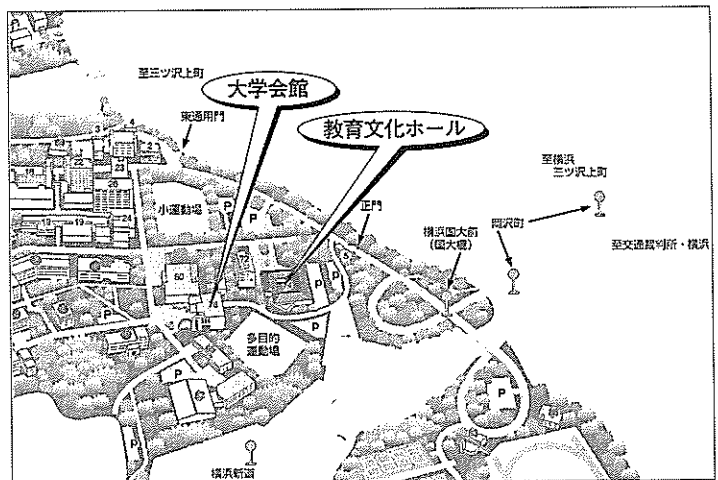
*なお、バスターミナルの乗り場地図、岡沢町からの大学へのアクセスは、横浜国立大学ホームページ

のアクセスマップをご参照ください。

■大会事務局からのお知らせとお願い

1. 懇親会参加費は4,000円です。当日受付にて申し込んでください。
2. 第二日目の昼食弁当(600円)希望者は第一日目に受付にて申し込んでください。
3. 宿泊に関しては、各自が手配してください。新横浜駅、横浜駅および会場周辺に比較的安いホテルが多数あり、インターネットでも検索できます。
4. 書籍販売は、各自が責任をもって、持ち込み・管理を行なってください。

懇親会参加者事前申し込みはなし。



学会からのお知らせ

■学会誌に関する記事の訂正

前号ニュースレター掲載の学会誌編集委員会よりのお知らせの誤りを次のように訂正します。

「学会誌編集委員より投稿締め切り時期変更のお知らせ」

『女性学』第13号編集委員会（誤）

→『女性学』第12号編集委員会（正）

・「2005年度日本女性学会誌『女性学』12号投稿原稿募集」
12号（誤）→13号（正）

■2005年度会費納入のお知らせ

2005年4月より新しい年度になりました。

同封の郵便振替用紙で、2005年度会費7,000円（2004年6月12日の日本女性学会大会総会で承認されました）をできるだけ早めにご入金くださいますようお願いいたします。

■会員による研究会の企画募集

大会が年一回に減ったことを受け、研究会を活性化していくことになりました。幹事会企画研究会を年に数回おこなう他、会員個人やグループ（自主的研究・運動グループ）のイニシアチブによる研究会についても、学会として経費補助や情報宣伝などを行って行くことになりました。

そこで、会員の皆様からの意欲的な研究会の企画をお待ちしています。詳細のお問い合わせは、研究会担当幹事（伊田広行・内海崎貴子）まで。

■第13期幹事会第6回幹事会報告

日 時：2005年4月3日（日）14：00～17：30

場 所：かながわ県民センター7階709号室

出 席：伊田、岩本、内海崎、金井、河原崎、北仲、
楠瀬、小林、佐藤、千田、武田、館

欠 席：荻野、釜野、田中

（50音順、敬称略）

（1）報告事項

- ① ジェンダー学研究連絡会主催シンポジウム『教育とジェンダー』を6月13日に開催。102号ニュースレターに掲載する。
- ② 101号ニュースレターに掲載された韓国で開催される女性会議の名称／訳語を統一し、混乱をさける。International Interdisciplinary Congress on Womenを「第9回国際学際的女性会議」とし、WW05は「ウィメンズ・ワールズ2005年」とする。
- ③ 会員状況、入退会者。会費値上げ。会費納入について。

④ 大会開催校準備状況についての報告。

⑤ 次号ニュースレターは、5月10日に発行。

（2）審議事項

① 日本女性学会のホームページ作成に関しては、次回にひきつぎ検討。

② ニュースレターをホームページに掲載し、紙メディアからの転換を検討。英文版、コンテンツの検討が必要。

③ 大会プログラム・運営体制について検討。

次回幹事会は大会当日6月12日。大会終了後、横浜国立大学にて。

■日本学術会議公開シンポジウムのお知らせ

日本学術会議第一部ジェンダー学研究連絡委員会では、以下のような内容で、シンポジウムを開催いたします。学校における男女平等教育のあり方や大学におけるジェンダー学教育のあり方などに関心を持つ方、ぜひご参加ください。

シンポジウム「教育とジェンダー」

日時：平成17年6月13日（月）16：00～19：00

会場：日本学術会議2F大会議室

（〒106-8555 東京都港区六本木7-22-34

Tel. 03-3403-5706）

主催：ジェンダー学研究連絡委員会

共催：日本女性学会、ジェンダー史学会、
国立女性教育会館

プログラム

司 会 江原由美子

（ジェンダー学研究連絡委員会委員長、日本学術会議第1部会員、東京都立大学教授）

佐藤 学

（ジェンダー学研究連絡委員会委員、日本学術会議第1部会員、東京大学大学院教育学研究科研究科長）

報 告

（1）「教育とジェンダーをめぐる諸問題」

国際基督教大学教授 藤田秀典

（2）「大学文化とジェンダー」

東京女学館大学教授 天野正子

（3）「教員養成・研修とジェンダー」

東京学芸大学教授 村松泰子

■『日本女性学会学会誌』を発行しました。

日本女性学会『日本女性学会学会誌』

新水社、12号／2005年3月15日発行

定価2500円（税込）

特集 ウーマンリブが拓いた地平

基調講演「自縛のフェミニズムを抜け出して一立派になるより幸せになりたいー」

田中 美津

1980年代以降の女性運動とリブー「女性に対する暴力」をめぐって

原田恵理子

引き裂かれた「女」の全体性を求めて

千田 有紀

フェミニズムとアカデミズムの不幸な結婚

菊地 夏野

投稿論文

下田歌子の社会構想と「手芸」

山崎 明子

強姦事件捜査にみる犯行動機ー「性欲」という語彙

牧野 雅子

研究ノート

日本キリスト教婦人矯風会と五銭袋運動

ー1910年代後半の廃娼運動資金募集活動を中心に

楊 善 英

書評

ベル・フックス『フェミニズムはみんなのものー情熱の政治学』

伊田 広行

金井淑子その他編『岩波 応用倫理学講義 5 性／愛』

吉田 俊実

Christopher Carrington, No Place like Home: Relationship and Family Life among Lesbians and Gay Men, Gillian A. Dunne (ed.), Living "Difference": Lesbian Perspectives on Work and Family Life

釜野さおり

■会員の著作

小林富久子『女性作家評伝シリーズ 円地文子

ージェンダーで読む作家の生と作品』

新典社、2005年。2205円。

日本の女たちが長く秘めてきた飢えや渴望を、『女坂』、『妖』など一連の、古典を媒介とするポリフォニックな小説群として浮上させ、戦後女性文学の金字塔を打ち立てた作家円地文子をジェンダーの視点から問い直す。

■『30年のシスターフッド

70年代ウーマンリブの女たち』

(制作／山上千恵子・瀬山紀子／57分／2004)

1970年代の日本のウーマン・リブたちの足跡。1970年代、性の抑圧からの解放（おんな解放！）を願ったおんなたちが、さまざまな場所で声をあげはじめました。それから30年と少しの年月がたちました。

『30年のシスターフッド』は、ウーマン・リブを生きたおんなたちのたくさんの語りから、ウーマン・リブを伝え、彼女たちが開いてくれた道とその現在の位置を知ろうとつくられたものです。

価格5,000円（ライブラリー価格20,000円）で、ビデオ・DVDとして頒布中。

<問い合わせ先>

女たちの歴史プロジェクト

〒150-0031渋谷区桜丘町15-8-504 ワークイン内

TEL03-3780-4446 FAX03-3780-1748

<書評>

9 LOVE編『9をまく』 大月書店、2005年

イダヒロユキ

ちょっといい本が出た。憲法9条や戦争／平和をめぐっていろいろな議論があるが、これはそれらとは少し違った角度から「9」をキーワードに、日常生活・足元の暮らし方に「平和／戦争放棄・軍隊放棄」の精神を見出そうとする。それは、パンを焼くことだったり、サーファーが海を守ることだったりもするが、とにかく、日本中に、世界中に、名もなき人々によっていろいろなことが行われ、考えられている。それを集めていく中で、「9」に命を吹き込もうとしている本なんだと思う。

とくに僕が気に入ったのは、沖縄のガンジーといわれるおじいちゃんの次の様な言葉だ。「武器をもたないで生きるものはすべて神様、宗教語でいうと善と考えるようになりました。あそこに歩いている鶏も生まれたときから死ぬまで人間のために奉仕し、人間がいくら卵を盗んでも武器を持って取り返しにこない。これも神様。」

また鶴見俊輔さんの「日本の知識人の記憶の短さ、○はもう古いという批判の仕方、そういうことへの無自覚」という批判。大きな戦争というものはとめられないように感じるかもしれないが、そういうまともな人たちの言葉や行動を受け取り、受け継ぎ、自分がまたそういう思想を持つ存在になっていこうとするところに希望を見出すのがこの本にはあふれている。

僕にとっては、「10点満点」に対して、「減らす」「捨てる」「クールダウン」ということの積極さを「9」が示しているというような発想が印象深かった。走り続けなくてはという強迫観念から離脱すること、捨てること、ものや仕事を減らすこと、上からではない形で差し出すこと。僕にとっての大きな課題のヒントがここにもあった。